

学校法人 北里研究所 北里大学東洋医学総合研究所だより



平成30年1月号 (第42巻第1号・通巻第169号)



右絵は岩崎灌園『本草図譜』に描かれたソウジュツ

蒼朮 (ソウジュツ)

キク科ホソバオケラは中国原産の多年草。草丈30～80cm、8～10月に白色の頭花をつける。漢方では、根茎を「蒼朮」と称する。冷暗所に密閉貯蔵することとで白い綿状の結晶が析出する

ものが良品とされ、別称、古立ち蒼朮とされる。関節の腫脹や疼痛を改善する効があり、疎経活血湯や五積散、二朮湯などに配合される。

(坂田 幸治)

新年のごあいさつ

北里大学東洋医学総合研究所

所長 小田口 浩



新年明けましておめでとうございます。本年一年が皆様にとりましてすばらしい年となりますよう、祈念申し上げます。

私ども、北里大学東洋医学総合研究所の理念は「東洋医学の叡智を極め、漢方鍼灸医療を通じて笑顔あふれる社会を実現する」ですが、具体的に漢方鍼灸医療をどのように提供して患者様の笑顔につながるか、我々は日々考えながら行動しております。新年にあたり、この点についての我々の考えをお話させていただきます。

さて、皆様あまりご存じないことかもしれませんが漢方鍼灸医療には2つの側面があります。一つは、厳密な意味での医療としての側面です。これは、疾病に

罹患し、健康を害した患者様の疾病を治療し、健康を回復する、つまり「病気をなおす」役割を指します。この場面では、漢方鍼灸は

それ単独で、あるいは現代医療といっしょに使われて病気をなおす役割を負います。現代医療は身体の一部分あるいは特定の働きを治療することで病気をなおしますが、漢方鍼灸医療は患者様の心身全体のバランスを整えることで病気を治すというように、両者はそれぞれ異なる役割を果たしながら疾病の治療に役立っております。漢方鍼灸治療セ

ンターにえられる患者様の大半はこの、病気をなおす、という目的で漢方鍼灸治療を受けられております。他方、あまり知られていないもう一つの側面は、健

康維持としての側面です。漢方鍼灸により健康状態を保ち、疾病が発生することを防ぐ、つまり「病気にならないようにする」側面です。現代医療は通常、病気が置かれ、病気になるように置かれるにはどうしたらよいか、という保健の問題は別個に取り扱われます。しかしそもそも天然の生薬が素材となる漢方薬は健康維持のために毎日私たちが口にする食材と大きな違いはなく、時には全く同じものが薬としても食物としても用いられます。そのことを考えれば、漢方薬を健康維持目的で服用することは理にかなっているということになります。この点、病気でなくても現代医療の薬を服用することは通常考えられないことと比べると、漢方薬が幅広い役割を持っていることにお気づきいただけるでしょう。

ただ、同じ健康維持目的で摂取する食物と異なり、どんな漢方薬を服用するか

は慎重に判断する必要が
あります。食物の場合は誰が
どんな物を食べても適正量
であれば通常安全で、必要
な栄養が得られますが、漢
方薬は個々人の体質によっ

健康維持目的に漢方薬を服
用した方がいかどうかの
判断には漢方ドックが役立
ちますので、皆様の周りの
方にもお勧めいただければ
幸いです。

てきちんと選び分けないと
本来の効果が得られない可
能性があるからです。どん
な漢方薬を選ぶかの判断に
は専門的な知識と習熟を要
しますが、漢方鍼灸治療セ
ンターの医師はこの分野の
プロフェッショナルであ
り、十分に皆様のお役に立
てると自負しております。

北里大学東洋医学総合研
究所は本年も、漢方鍼灸診
療医療の技術の高いレベル
で維持しながら、さらなる
高みを目指して研鑽に励
み、皆様の健康に寄与すべ
く努力して参ります。皆様
の叱咤激励をいただければ
幸いに存じます。

人には聞けない排尿トラブル



鍼灸診療部

黒 岩 奈々子

「排尿トラブル」はなかな
か人には相談しにくく、つい
つい「年のせい」だとあきら
めていたりしませんか？我
が国における排尿障害の有
病率は加齢とともに増加し、
高齢者ではとくに内臓機能
の低下や膀胱の萎縮などに
よって排尿トラブルを抱え
ている方が多くいらっしや

います。高齢者にとって排尿
トラブルは生活の質(QOL: Quality of Life)を障害する問題
であり、高齢化が進行する現
在、今後さらにクローズアッ
プされてくる疾患のひとつ
です。排尿に関する症状を詳
しくみてゆくと蓄尿症状(尿
が我慢できない…)、排尿症状
(尿の勢いが弱い…)、排尿後

症状(尿切れが悪く残尿感が
ある…)に大きく分類され、

これらの3つを合わせて下
部尿路症状(UTS: Lower
Urinary Tract Symptoms)と
呼ばれています。排尿のトラ
ブルの原因は多様にあり、も

ちろん男女の排尿機能の違
いから出現する症状は異な
ります。男性では前立腺のト
ラブル(前立腺肥大、前立腺
炎、前立腺癌など)により尿
の出が悪い、夜間頻尿などの
症状が多く、一方女性は男性
に比べて尿道が短いため、咳
やくしゃみなど急に腹圧が

かかった時に起こりやすい
尿漏れ(腹圧性尿失禁)や膀
胱が過敏になり活動性が高
まっている状態(過活動膀胱)
による頻尿が多いと言われ
ています。他にも、尿路結石、
尿道炎、生活習慣病(糖尿
病)、精神的要因、服薬中の薬
などによって排尿トラブル
を引き起こすことがあるた
め、自覚症状があれば一度泌
尿器科を受診をお勧めします。

排尿トラブルに対する治
療法に関しては、多くの疾患
においてまず薬物療法が行

われ、症状の程度が強い又は

薬物療法でも効果が不十分
な(抵抗性)重症例で外科治
療が行われます。高齢女性に
多くみられる尿漏れに対し
ては、骨盤底筋体操を継続し
て行うことが重要です。骨盤

底筋体操は妊娠・出産や肥満
などの原因による骨盤底筋
の緊張低下による尿漏れに
有効であるとされます。また、
骨盤底筋を鍛えることによ
って尿意切迫がおさまる
など排尿症状の改善が期待
できます。

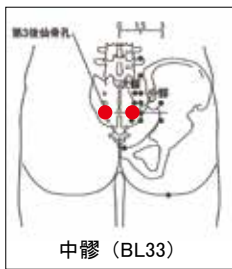
鍼灸治療では、上記に示し
た下部尿路症状に起因する
症状の改善を目的に治療を
行います。例えば前立腺肥大
に伴う頻尿や尿意切迫感、過
活動膀胱による頻尿、尿失禁
に対し、仙骨部にある太陽膀胱
経上の中脲穴に10分間刺
激を行うと、膀胱容量が増加
し蓄尿機能が改善するとい
う報告があり、また尿失禁に
対しても症状の軽減が期待
できます。ただし、前立腺肥

大症で病期が進行し尿道狭
窄によっておきる残尿感や
排尿困難、又は膀胱炎などの

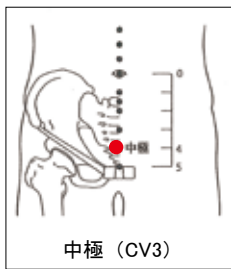
尿路感染に起因する排尿障

害については一般的に鍼灸
治療の適応とは言えません。
こういった場合は西洋医学
の薬物療法に加え鍼灸治療
を併用することによって症

状の改善が得られます。当施
設では、全身治療に加え局所
治療として骨盤内の循環改
善を目的に下腹部にある曲
骨、中極、大赫穴、腰部にあ
る経穴にも鍼灸治療を行
います。排尿トラブルを抱え
ている方は日常生活の中で過
剰な水分やカフェイン、アル
コールの摂取を避け、夕方に
降の水分摂取の制限、便秘の
解消をこまめに行っていく
ことも大切です。



中脲 (BL33)



中極 (CV3)

引用文献：WHO/WPRO 標準経穴部位
-日本語公式版-；医道の日本社。2009年

第34回和漢医薬学会

学術総会の報告

EBMセンター 上級研究員 関根 麻理子



2017年8月26～27日の2日間、九州の福岡市で和漢医薬学会学術総会が開催されました。「和漢薬の未来につなげる ―基礎と臨床の橋渡しの推進―」をテーマに掲げ、基礎研究と臨床応用に関して双方方向の情報交換し、和漢薬の役割について最新のサイエンスで実証できることを目指した会でした。870名もの医師・薬剤師・研究者が集い、盛況のうちに終了しました。

「麻黄の中枢神経興奮作用におけるエフェドリンアルカロイドの作用様式」にて優秀発表賞を受賞しました。関係者一同、今後の研究に対する気持ちを新たにしたいことと思います。

花輪壽彦教授・小田口浩所長がオーガナイザーを務めた「漢方医学的所見の客観化に向けた取り組み」は、共同研究を実施している6機関の漢方専門医と聴講者一体型のシンポジウムで、関連研究成果物の展示会場を併設するなどの趣向が凝らされていました。日向須美子・臨床研究部室長

学会奨励賞を受賞した伊藤直樹・臨床研究部上級研究員は「ストレス誘発うつ様モデルマウスを用いた香蘇散揮発性成分の抗うつ様効果に関する解析」について講演しました。また、竹元裕明・臨床研究部客員研究員は

伊藤直樹上級研究員の受賞講演の様子



伊藤直樹上級研究員の受賞講演の様子



展示会場の様子

がオーガナイザーを務めた「麻黄の基礎研究から誕生した新しい生薬エキス製剤・エフェドリンアルカロイド除去麻黄エキス（EFE）の医薬品化と臨床応用に向けた研究」では、シン

ポジストとして花輪教授による「臨床医からみた麻黄剤」、小林義典薬剤部長の「麻黄及びEFEの鎮痛効果と副作用」、小田口所長の「健康成人を対象としたEFE安全性を検討する臨床薬理試験」と基礎から臨床まで幅広く情報発信することができたと思います。

一般演題では、及川哲郎副所長から「上部消化管症

状に対して蒼桂朮甘湯が奏功した3症例」、伊藤直樹上級研究員から「漢方方剤『香蘇散』の社会的ストレス誘発うつ様行動の再発防止効果」、遠藤真理・臨床研究部上級研究員から「大建中湯の構成生薬・乾姜の術後腸管麻痺に対する抗炎

症効果の作用機序」の発表がありました。懇親会は、博多湾に浮かぶ華やかな夜景を楽しめるクルージングで、優雅なひとときを過ごしました。今回は、2018年9月1日（2日）に岐阜県岐阜市で開催される予定です。

昨年（2017年）の10月1日（日曜日）に福島県福島市コラッセふくしままで漢方治療研究会が行われました。この研究会は、1991年に漢方湯液治療研究会として、当研究所の第二代所長である矢数道明先生が中心となり立ち上げたもので、今年で27回目の開催となります。

く、漢方的にとっても内容の濃い研究会です。今年（2018年）は福島県立医科大学津医療センターの三瀧忠道先生会頭のもと「語り合おう、臨床の醍醐味を」をテーマに、症例報告、指定講演、ランチョンセミナー、シンポジウムからなるプログラムで行われました。その中でも特に矢数芳英先生の講演で興味深い症例のお話がありましたのでご紹介いたします。矢数先生自身のご家族の症例で、長らく原因のはっきりしない頭痛に悩まされていたとのことでした。

第27回 漢方治療研究会の報告

漢方診療部 石毛 達也



漢方治療研究会の報告

CTで精密検査をしたところ、副鼻腔炎の合併症が原因であることがわかりました。炎症が強く抗生剤の内服などの一般的な治療では症状が改善しないため手術

をするようになりました。手術までの間、矢数先生は荊芥連翹湯という漢方薬をご家族に服薬させました。そして手術当日、担当医が手術で副鼻腔を開放すると、中に溜まっているはずの膿は消失していて、とても驚いたそうです。荊芥連翹湯が予想以上に効いた、というお話でした。荊芥連翹湯は副鼻腔炎や扁桃炎の患者の体質改善を目的として使われることの多い処方

生薬の組み合わせによる多成分の効能による結果と考えられますが、これが漢方治療の醍醐味だと思います。

当研究所からは小田口所長が「三症例を通じた五積散口訣の考察」という題目の演題で講演をされました。五積散は薬味の多い複雑な処方ですが、江戸時代の名医である津田玄仙の口訣（処方運用に関する口伝）通りの治療でよくならず3症例を通して五積散の使い方をわかりやすく説明して頂きました。私は研究会終盤のシンポジウム「医案を語る」に演者として参加しました。日本漢方の中にもいくつかの流派がありますが、同じ患者を診た時に流派間で選ぶ処方や思考過程が大体同じなのかどうかを検討するということが本シンポジウムの大きな目的でした。5

つの施設から一人ずつ提示された症例について候補処方と処方選択までの考え方を発表しました。各流派で診断の過程を比較するような企画はこれまで無かったので答えが一致するかどうか心配しましたが、最終的な解答はほぼ同じで発表者はお互いに安心していました。候補処方については施設ごとの特徴がでており、その施設の伝統や師匠の影響が処方に反映されている点でとても興味深く思いました。漢方では自分が研修を受けた施設以外の治療方法をみる機会はありません。そのため、このような企画を通して他流派のやり方を知ることが大変有意義なことだと思えました。



発表中の石毛医師

第45回日本伝統鍼灸学会
 学術大会の報告
 加畑聡子
 医学部 加畑聡子
 平成29年10月14日・15日
 石川県立音楽堂（金沢市）にて開催された第45回日本伝統鍼灸学会学術大会に参加しました。

今回のテーマは「日本伝統鍼灸の確立に向けて」であり、伝統から未来へ」であり、昨年開催されたWITAS Tokyo Tsukuba 2016大会の成果を

継続する形で、海外からの講師によるプログラムを導入する一方で、日本伝統鍼灸の神髄と言える各流派の先生方の実技供覧を設けるなど、日本伝統鍼灸について多角的な立場から検証する大会となりました。

シンポジウム「伝統医学の正しさの基礎」概念を共有するために」では、世界情勢における日本鍼灸の立場を踏まえ、伝統鍼灸が医療としての役割を果たすために必要な用語の規定や方法論について議論されました。

当研究部客員研究員の天野陽介氏と安井医院院長安井廣迪先生の対談「臨床から見た鍼灸医学史」では、日本

伝統鍼灸の理解に必要な不可欠である医学史が、臨床的観点から包括的に取り上げられました。経絡治療学会副会長の馬場道敬氏による特別講演「巨匠 岡部素道先生」は、当研究所初代鍼灸診療部長として尽力した岡部素道先生の業績が、弟子の視点から明らかにされました。また、会の最後には、「日本と中国、浅鍼はどう違うか」と題して日中鍼灸学術交流会が開催されました。その内容は、日本と中国で行われている接触鍼（刺さない鍼）や浅鍼（浅く刺す鍼）を披露し、意見交換することで、互いの理論と技術についての理解を深め、日中の学術交流の推進を図るもので、日本の伝統的な浅鍼の技術を世界に啓



当研究所蔵「経絡人形」

発する、素晴らしい機会となりました。

私は「江戸時代の「経絡人形」についての一考察」北里大学東洋医学総合研究所蔵「経絡人形」を中心に」について報告し、発表奨励賞を受賞致しました。

経絡人形とは、経脈や経穴を附した人体模型のことで、江戸時代の医学教育の教材として多く用いられていました。この人形は、高70.5cm、肩幅15.5cm、紙塑(張子)製、白色、約5頭身ほどの体型で、胴体に対し頭と腹、手足が大きく作られています。伝来は未詳ですが、その形態的特徴から江戸時代の製作と見られます。脊椎や12本の肋骨は隆起し、腓腹筋、長掌筋や橈骨手根屈筋の

境界に凹凸が見られるなど、解剖学的知識を踏まえ、経穴位置を決めるために重要な部位を強調して製作していることがわかります。また、全身に描かれる色分けされた14本の経脈から、江戸時代に流行していた元代の医書『十四経発揮』の影響が窺えます。

「経絡人形」は東洋医学総合研究所2階東洋医学資料展示室で展示中ですので、ぜひご覧下さい。



発表奨励賞受賞の様子

日本生薬学会第64回年会



「千葉」の報告

薬剤部 白畑 辰 弥

日本生薬学会第64回年会

が2017年9月9日と10

日の両日千葉県習志野市の

東邦大学薬学部で開催され

ました。生薬学は天然資源

として利用される植物等の

分類、形態、栽培、生薬の

品質評価、成分の化学と生

物活性、臨床応用など広い

範囲を含む重要分野です。

特別講演として東京薬科大

学名誉教授 指田豊 先生に

よる「植物観察会とその意

義」と題して、色鮮やかな

写真を用いて生薬として利

用される身近な植物の見分

け方や含有される有効成分

等の広範な内容の生薬学ら

しい講演がありました。

漢方薬への関心の高まり

故に、漢方関連の演題も多

く発表されてきました。そ

の中でも本年会では、基礎

研究部の清原寛章教授(北

里生命科学研究所 和漢薬

物研究室)が「漢方研究の

新展開」と題したシンポジ

ウムをオーガナイズしまし

た。本研究所では、科学技

術振興機構(略称JST)

等の支援をうけてセンター

オブイノベーション(CO

I)プログラムという国家

プロジェクトに参加し、情

報通信技術(ICT)を利

用して修得が難しい漢方診

断のロジック(過程や生薬

の品質鑑別を形式知化(見

える化)する取り組みを

行っております。本シンポ

ジウムでは、漢方診療部石

毛達也 医師が「未病と漢

方」の題目で講演し、CO

Iでの取り組みや、さらに

「未病」に有効な漢方処方

について、臨床事例を交え

て講演しました。また臨床

研究部 伊藤直樹 上級研究

員は「ストレス社会におけ

る漢方方剤の位置づけ―ス

トレスモデル動物を用いた

基礎研究から見えてきた漢

方方剤「香蘇散」の役割」の

題目で、「うつ様状態」を

改善する代表的な処方であ

る香蘇散の作用メカニズム

の解明に関する研究成果に

ついて解説しました。

東医研関係では、他にも

「最新の香り研究の基礎と

応用」と題したシンポジウ

ムで、臨床研究部 竹元裕

明 客員研究員(薬学部生

薬学教室助教)が「香り成

分の単離と機能解明」の題

目で、植物に含まれる香り

成分の解明とその機能解明

についての研究について講演

しました。一般発表では、

「ゴシユのメタボリック

プロファイリング;

HMNR及びGC/LCの比

較」福井県高浜町産ゴシユ

の化学的品質評価」(両演

題とも白畑辰弥ら)の演題

で発表しました。この2つ

の発表もCOIプログラム

で実施している生薬の品質

管理の研究成果です。

次回第65回年会は来年9

月16日~17日の2日間、広

島市の安田女子大学で開催

予定です。

最新 漢方研究の世界

漢方診療部 副部長 星野卓之

薬効を予測できる未来へ

漢方は、現代医薬のように限られた成分に偏らずに、天然生薬を組み合わせて効果を出します。そこに含まれる化合物は多種にわたり、相互作用を前もって予測しにくい面があるため、漢方医は古典的知識や経験を活用して診療を行ってきました。最近になって新しい薬理遺伝学検査を応用できる環境が整いつつあります。

内服した薬は食事と同じように胃腸で吸収され、肝臓などで代謝されますが、その過程には遺伝的な個人差があり、通常量でも副作用の出る場合があります。アメリカ食品医薬品局（FDA）などが警告する薬剤が増えるなか、薬物代謝に関する遺伝子検査については専門家への相談を要さずとも行えるようになっていきます。

一例をあげますと、某ベン

チャー企業の本東アジアへの展開で、450種以上の薬剤応答性がわかる検査が、1遺伝子あたり千円ほどの費用で受けられるようになっていきます。この中には生薬の黄芩や甘草に関する項目が含まれ、中国・韓国での普及状況によっては、さらに漢方診療に役立つ内容が増えることが期待されます。

副作用が懸念される抗がん剤や抗血栓薬などを用いる際にはこの検査がよい適応になります。漢方のように穏やかではあるものの複雑な効能の薬が組みあわされる場合にはどのような評価したらよいでしょうか。身近なところで言えば、お酒に弱いタイプの人が飲み続けていると強くなるように、代謝速度は飲食物や内服薬によって変化するものです。

そのためには吸収する胃

腸と代謝する肝臓などを合わせた、からだ全体で機能を評価する必要があります。これに有望と考えられる検査に、炭素の安定同位体を用いた呼吸試験があります。

通常の炭素より中性子が1つ多い¹³Cは放射線被曝のない安全な同位体で、自然界にも1%存在しています。試薬中の¹³C化合物が体内で分解されると二酸化炭素として呼吸に現れるため、リアルタイムに代謝をみることもできます。

呼吸試験は胃癌や胃十二指腸潰瘍と強い関連があるピロリ菌検査にのみ臨床応用されていますが、さらにお酢やお酒の成分である酢酸やエタノールを用いても胃腸の動きや肝臓の代謝を測定することができます。また薬の代謝を直接調べられる一例として、抗がん剤5FUには¹³Cウラシルを用いる方法があります。これらの試薬はまだ高価で保険認可されていないため臨床応用はまだ難しい状況ですが、今後注目すべき検査と言えます。

漢方豆知識

板藍根

薬剤部 高際 麻奈未



風邪やインフルエンザが流行する季節となりました。手洗いやうがいなどで予防される方も多くいらつしゃると思います。しかし、十分に気をつけていても疲れている時や免疫力が低下している場合には罹患してしまうこともあります。

日本ではあまり知られていませんが、中国では風邪やインフルエンザの予防に板藍根の煎液がお茶代わりに飲まれたり、うがいなどによく用いられています。

板藍根はヨーロッパ原産のアブラナ科の植物、ホソバタイセイの根茎および根で、ヨーロッパからロシア、アジアに広く分布する2年草です。5月頃に4枚の花びらを持つ黄色い小さな十字状花を多数つけます。

板藍根は薬物学書の『神農本草経』に「藍」の名で



記載されています。アイと呼ばれる植物にはホソバタイセイの他にナンバンコマツナギ、タイセイ、リュウキュウアイなどが知られています。これらはインジカという成分を含み、植物の発酵と空酸化によって藍色染料のインジゴとなることから、古くから藍染めの原料として利用されてきました。ホソバタイセイは江戸時代に染料植物として中国から入ってきました。

一方、ヨーロッパでは主にホソバタイセイを青系の染料としてインジゴが合成される16世紀末まで用いてきました。フランスではホソバタイセイは「パステル」という名前で知られていました。古代から藍色染料として重用されていたホソバタイセイを「*pastel des teinturiers* (染物屋のバステル)」と呼んだのが始まりだそうです。パステル画を描く時に用いるパステルもこの植物由来しています。

東洋医学では板藍根を清热・涼血・解毒の目的で用います。抗菌作用・抗ウイルス作用、免疫機能を高める働きがあり、扁桃腺炎、带状疱疹やヘルペス、ウイルス性肝炎などに応用されます。新種の病原菌やウイルスにも対応でき、以前SARSが流行した時に中国国内で需要が高まったこともありました。

「光」+「明」といった名前から連想される通り、目の病に効果が期待できる経穴です。位置は、下腿外側で、外踝の上五寸の高さ(膝までの約三分の一の高さ)にあり、全身を廻る正経十二経脈のうち、足の少陽胆経に所属しています。また、胆経の中でも絡穴と呼ばれ、胆経と表裏関係にある足の厥陰肝経にも影響を及ぼし、この表裏関係にある二つの経脈に対する治療効果があるといった特徴を持っています。

胆経は図に示したように、目尻から始まって、側頭部、体側、下肢外側を廻って足の第四趾と第五趾の間に至ります。経脈の異常はその走行上に現れ、胆経の場合、目の異常も含まれています。一方、肝経も目と繋がりの深い経脈です。古代中国で記された最も重要な医書の一つ、『鍼灸甲乙経』に次のような一節があります。「鼻は肺の官、目は肝の官、口唇は脾の官、舌は心の官、耳は腎の官。」ここに記された鼻、目、口唇、舌、耳は五官と呼ばれる五つの器官で、それぞれ五臓と対応しており、対応する臓の異常がこの五官にあらわれることが示されています。さらに肝に関し

ツボの効用

光明 (こうめい)

鍼灸診療部 **伊藤雄一**



る、ということを知って、肝と目の関係の深さを示しています。このように胆経と肝経は両方とも目に関係があり、この両方の経脈に影響力をもつ光明は、これらの経脈

の治療を介して、目の病に効果があるとされています。



足の少陽胆経



光明の位置

古医書のはなし

和田東郭とその著述

北里大学客員教授 **小曾戸洋**



和田東郭は江戸中後期に活躍した医家で、折衷派の代表的臨床医として知られており、昭和の漢方界において本研究所初代所長の大家敬節ほかから高い評価を受けています。東郭は延享元年(1774)8月12日、摂津国高槻(大阪府高槻市)に生まれ、臨床第一の折衷派として一

家を成しました。

仕官にあたっては、始め二条公に仕え、御医、法橋と累進。中宮の不妊症に治効を奏したことから尚薬、法眼に叙任されました。享和3年（1803）8月2日没、享年60。京都東山の鳥部山に葬られました。

東郭の代表的著作とされる『蕉窓雑話』は、東郭の口述により門人が筆録した医論集で、全5編。2編までは文政6年（1823）に刊行。3編以下は弘化3年（1846）の刊行と思われる。本書は平易な和文で書かれ、巻首に東郭先生医則を掲げてその哲学を示し、ついで腹診術など東郭の医術をさまざまの角度から論述しており、古方に対する卓抜した臨床見識をあらわした有用書とされています。

このほか、東郭の著で刊本（印刷物）となったものに『蕉窓方意解』『導水瑣言』『含章齋腹診

録』などが知られていますが。これら刊本はすべて門人の筆録によっており、東郭自身は臨床に徹し、直接筆を執ることはありませんでした。また、写本によって伝えられた著述も少なくなく、『東郭医談』『和田泰庵（泰純）方函』『百疾一貫』などがあります。

「方を用いて簡なる者は、その術日に精し。方を用いて繁なる者は、その術日に粗なり。世医やよすれば簡をもって粗となし、繁をもって精となす。哀しいかな。」これは大塚敬節、また本研究所三代目所長の大塚恭男がよく復誦された東郭の名言です。



『蕉窓雑話』北里大学東洋医学総合研究所蔵

メディア紹介

- 〔雑誌〕
 - 朝日新聞出版 『週刊朝日』「物忘れはクスリで治る時代!？」9月22日号 川鍋伊晃
 - 株式会社からだにいいこと 『からだにいいこと12月号』「みんなの冷え症がなかなか改善できない理由」伊藤 剛
 - 月刊テームス「くらしとからだNo.94」「漢方ドックは見逃さない病気の前兆の自覚症状」石毛達也
 - ハースト婦人画報社『Richesse（リシエス）No.21』「私たちの知らない鍼灸の力」伊藤 剛
- 「自分の証を本格的に知るために漢方ドックへ」石毛達也
- 〔テレビ〕
 - TBSテレビ名医のT H E 太鼓判 「芸能人の口の悩みを解決スペシャル」平成29年10月23日（月）伊藤 剛

東洋医学総合研究所 外来案内
漢方鍼灸治療センター

休診日：日曜日・祝祭日・年末年始（12/29～1/3）
ホームページ：http://www.kitasato-u.ac.jp/toui-ken/

代表：03-3444-6161
予約電話：03-5791-6169
（月～金）8:30～17:00
（土曜日）8:30～12:30
お薬に関するの問い合わせ：
03-5791-6167

漢方科 (平成30年1月～) 鍼灸科

	月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土	
午前	花輪 ^① 星野 石毛	花輪 鈴木 石毛	花輪 ^② 及川 川鍋 齋藤	花輪 小田口 及川	伊藤 ^③ 鈴木 森 ^④	小田口 ^⑤ 及川 ^⑤ 鈴木 ^⑤ 星野 ^⑤ 森 ^⑤ 川鍋 ^⑤ 石毛 ^⑤	午前	伊藤 ^③ 石原 黒岩 小山	柳澤 石原 井田 小山	石野 石原 井田 黒岩	伊藤 ^③ 石原 伊藤 ^④ 小山	石原 ^⑤ 井田 黒岩 小山 近藤	伊東 ^⑥ 石原 井田 ^⑥ 黒岩 ^⑥ 伊藤 ^⑥
午後	^{〔冷え症 外来〕} 鈴木 森 ^④ 川鍋	伊藤 ^③ 鈴木 川鍋	星野 石毛 遠藤	小田口 及川 五野 森 ^④	星野 ^④ 森 ^④ ^{〔冷え症 外来〕} 伊藤 ^③		午後	石原 井田 小山 近藤	黒岩 伊藤 ^④ 小山 近藤	石原 伊藤 ^④ 霜降 近藤	井田 黒岩 小山 近藤	伊藤 ^⑤ 石原 伊藤 ^④ 小山	

初診受付時間

漢方科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～10:30	8:00～10:30
午後	12:50～15:00	


鍼灸科

鍼灸科	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～10:00	8:00～10:30
午後	12:50～14:30	

再診受付時間

漢方・鍼灸	月～金曜日	土曜日(午前のみ)
午前	8:00～11:00	8:00～11:30(鍼灸) 8:00～12:00(漢方)
午後	12:50～15:30	

漢方と鍼 第169号
発行日／平成30年1月1日
発行人／小田口 浩
編集／北里大学東洋医学総合研究所
漢方と鍼編集部 代表・伊藤 直樹
東京都港区白金5-9-1
TEL 03 (3444) 6161



WEBサイト

- ※青字は男性医師または男性鍼灸師
赤字は女性医師または女性鍼灸師
※専門外来では一般の患者様の診療も行っていきます。
- ①：月曜日午前の花輪医師の外来は、初診のみとなります。
 - ②：水曜日午前の花輪医師の外来は、第2水曜日が休診となります。
 - ③：金曜日午後（第1・3）の伊藤（剛）医師の冷え症外来は初診のみとなります。
 - ④：第2・4金曜日のみとなります。
 - ⑤：土曜日の外来は交代制となります。スケジュールはホームページまたは予約電話へお問い合わせ下さい。

漢方ドック

月～金（完全予約制）
9:00～15:30

(制作／機博委託)